

書 評

浅井憲義・大熊 明（編）

クリニカル作業療法シリーズ 認知症のある人への作業療法

守 口 恭 子
（健康科学大学，作業療法士）



本書は、人が作業をすることに焦点を当てて、認知症のある人の作業活動をていねいに論じているところに特色がある。

本書は、まず作業療法の歴史的過程を、介入手段となったクラブの活用から、目的のある活動へ、そして意味ある活動へ、と紹介する。それを踏まえて認知症のある人の作業活動が現在展開されているのである。一方、認知症のある人は長い生活歴がある。認知症の

ある人の「今」はその延長線上にあるのである。

そして最後に、認知症の作業療法の実際として、精神科病院、一般身障病院、重度認知症デイケア、介護老人保健施設、グループホーム、デイサービス、若年性認知症で展開される作業療法をわかりやすく事例を踏まえて紹介する。それぞれ異なった立ち位置から、目的に応じて OT は理論を駆使しながら懸命の作業療法を展開して

いることが伝わってくる。

作業療法も人間の人生も、悠久の時間の流れの中にあることを感じさせ、認知症のある人が主体的に作業をすることを温かく見守る視点が感じられる専門書である。

〔 B5 判 274 頁 3,800 円 + 税 〕
中央法規出版 刊
☎ 03-3379-3862

書 評

玉垣 努・渡邊慎一（編）

クリニカル作業療法シリーズ 福祉用具・住環境整備の作業療法

高 畑 進 一
（大阪府立大学，作業療法士）



本書を読んで、ある新聞に「めがねのごとくあたりまえに福祉用具を使えるようにしよう」という記事が掲載されていたことを思い出した。介護保険導入を前に福祉用具や住宅改修への関心が高まっていたころのことである。現在、用具の種類と住環境整備の手段は圧倒的に増え、利用者の生活の質的向上に寄与している。

この福祉用具・住環境整備に関わる OT の役割は、当事者と家族

の生活ニーズを実現するために彼らの能力と用具・設備を適応させることにある。しかし、言うは易し行うは難し。なぜなら彼らのニーズ、障害と能力、そして用いる用具は実に多彩だからである。このような難しさの解決には視座の明確化が必要である。

本書は当時者の意味ある行為を支援する OT の立場から床上・起居動作等の各行為を行う意味、疾患別の動作障害の特徴、用具と設

備の具体的適用方法を述べたものである。各 OT の経験に基づく知見も数多く盛り込まれ、OT が福祉用具と住環境整備に関わるときの視座を示す書となっている。多くの学生と療法士にぜひ読んでいただきたい。

〔 B5 判 310 頁 3,800 円 + 税 〕
中央法規出版 刊
☎ 03-3379-3862